

楽しい学級経営

1998
No.151

2

子どもの「自己解決力」を鍛える

子どもを育てる言葉

静岡大学教授

馬居政幸

子どもの育ちに謙虚になることから

「久保の人氣が出すぎたからだよ。主人公は田仲俊彦なんだから」

なんのことかわかりますか。語ったのは中学二年の次男です。ヒントは少年マガジンの「シュート」(大島司)。そうです。久保嘉晴の死についてです(わからない方は単行本⑥を)。昨年、心の教育の観点から子どもの道徳性とマンガとの関係についての原稿を依頼されました。ちょうど一男の部屋で「シュート」を見つければまけてしまい、特に、尊敬し憧れるキャプテン久保の死にうちひしがれる田仲の姿と「トシ サッカー 好きか?」「ハイ」という言葉が書かれた見開き全体を使った絵に大感動状態の時でした。

そこで、この久保の死を巡る人間模様をもとにまとめようと考え、「一男に「久保が死んだこと、みんなどんな風に思っている」と聞いたわけです。しかし、反抗期真っ盛りの中の息子ですから、無視されることも覚悟していました。ところが、一男の返事は私の予

想をこえたもの。それが冒頭の言葉です。

あまりにも的確にマンガのストーリー構成の方法を見抜く二男の成長に驚きました。もちろん、「一男もこのシーンに感動していたはず。少ないこづかいをさいて、単行本を全巻そろえているのですから。でも、その感動する自分を外からながめ、なぜこのように展開になるのかを作家、編集者、読者、そして、本が売られなければこまる出版社の立場をも考えて判断していたわけです。

子どもは日々成長しています。励ます言葉の前に、まず子どもの育ちの事実にかに謙虚になれるかが課題。それは言葉が不必要ということではありません。一男の成長は私の問い掛けてわかりました。教師がどれだけその子の得意な世界、誰にもないその子独自の世界を見いだし、認め、評価し、それをその子自身も含めてみんなに理解させられるかどうか。この教師の思いが自ずとその子に最もふさわしい言葉に結晶すると考えます。

